

令和7年度 第2回上牧町総合教育会議 議事録

- 日 時 令和7年11月28日（金）13時30分から15時15分まで
- 場 所 上牧町役場 2階 第3会議室
- 出席者 阪本町長、永井教育長、東谷委員、渡邊委員、暁委員、福井委員
- 事務局 丸橋理事、辻村課長、吉川課長、細川課長、千葉指導主事、岡田指導主事、柏原園長（上牧幼稚園）、山下部長、水本課長、佐野所長（第1保育所）、中本課長、土井課長補佐、高野係長
- 次 第 開会
町長挨拶
案件
 - 1 就学前教育について
 - 2 教育大綱・教育振興基本計画・総合計画の統合について閉会

●議事概要

案件1 就学前教育について

（担当課説明）

永井教育長 今回の就学前教育に関して、皆さんの意見をいただく機会ということでこのテーマにさせてもらった経緯も含めて、岡野先生の紹介もあわせて、少しお話をさせていただきます。

阪本町長は、主要政策で、子育て・教育で選ばれるまちづくりということ掲げており、教育委員会としても、学び推進プランで、いろいろ示しているとおりであるが、私としては、やっぱり上牧の子どもたちに「幸せになる力」を身につけて欲しい。そのためには、従来から言われているトライアングルの知徳体、まず確かな学力、それから豊かな人間性、たくましい心身、それぞれにおいて力を高めてもらいたい。あわせて、もう1つのトライアングルということで、学校・地域・家庭、この3つが連携して子どもたちを育てていくんだということで取り組んでいるわけであるが、現在学校教育における課題として、全国学力学習状況調査の結果が、ここ数年平均値を下回ることが続いている。こういった課題を改善していく、子どもたちの生きる力をしっかり育ていくためには、幼少期からの系統的な取組が必要であると考えている。

幼少期から初等教育中等教育、さらに高等教育につながっていくが、それぞれの機会における学びの基盤と言われる「認知・非認知能力」は、幼少期、就学前の期間に育まれるということは、様々な研究を通して、明らかになっている。そこで、将来に向けた学びの基盤が形成される5歳、それから小学校1年生、この2年間に注目して、上牧でも幼稚園、保育所、小学校が連携し、幼保小の架け橋プログラムをしっかりと共有して連携していきたい。

今回、奈良学園大学の人間教育学部の岡野聡子先生に助言をお願いしており、この方は、基礎から学べる保育内容、また、子どもとともに未来をデザインする保育者論、教育者論、そういった分野、保育に関する著書を多数出版している。本日は別の学会があり、出席が叶わないということで動画を作成していただいた。まずは動画を見ていただいて、皆さんから質問、感想や意見を伺っていきたいと思っている。

(動画視聴)

永井教育長 まず幼稚園の方で、岡野先生が聞き取りをしてくださって、その内容も資料の中で説明があった。幼保小の連携において、幼稚園の現状に関する補足があればお願いしたい。同じように保育所の様子も紹介いただけたらと思う。

柏原園長 補足としては、岡野先生が来てくださって、一緒にお話しさせていただく中で、私自身感じているのは、子どもたちの様子を見ていて、すぐに諦めてしまう子が多くなってきたように思う。

また、幼稚園の研究主題というものが今までなかったのも、それを職員みなで相談して、幼稚園として、子どもたちにとって何が足りないのかというところを話し合って、それを主題として取り組んだ方がいいということを岡野先生に教えていただいた。来月12月にまた岡野先生に来ていただいて、幼稚園としての研究主題を決めて取り組んでいけたらと思っている。

永井教育長 もう1つ付け加えて、資料の「2. 幼保小のかけ橋プログラムの重要性」を見たときに、実質的な連携と協働があり、この中でカリキュラムの連続性の確保や教員・保育者の協働研修、家庭地域を含む支援の継続と3つあったが、この3つについて、今の上牧幼稚園の状況を教えてほしい。

柏原園長 カリキュラムの連続性では、今年からカリキュラムづくりを言われているので、年長の毎月のカリキュラムを話し合うときに、どんなことが小学校1年生に向けて、つながっているかというところの見直しをしているところである。教員・保育者の協働研修はこれからしていけたらと思っている。

家庭地域を含む支援の継続のところでは、幼稚園での遊びがどういう学びにつながっているかというところを家庭に知らせて、園だよりやクラスだよりなどで知らせていたり、また、遊んでいるところの写真を幼稚園に貼ったりして、保護者に伝えている。

永井教育長 次は保育所の状況について教えてほしい。

佐野所長 子どもの発達上の課題に関して、意欲、粘り強さというのは、同じように、

すぐに諦めてしまうということはあるが、挑戦しないという傾向はあまり見られないと思う。

体力づくりについて、確かに今の子どもたちは、体幹が弱く椅子に座れないということはあるが、基本的に0歳1歳の小さい頃から保育をさせていただいて、5歳になる頃にはしっかり座れるようになってきていると私自身は思っている。生活習慣については、好き嫌いがあり、野菜が苦手で食べないということを保護者からよく言われる。保育所では食べるが家では全く食べない。また、家ではなかなか座って食べない、落ち着きがないということも言われる。

生活習慣の定着については、排泄でおむつが取れるのが遅い子もいると聞いており、5歳時には取れているが生活習慣の定着が遅い子もいると思う。

社会性などは、幼稚園の芋掘りの話を聞かせていただいて、保育所では、この間も芋掘りに行ったが、大きい芋を持って帰ろうとみんな一生懸命だったので、少し違うかなと思った。リレーも休みの子がいると、「僕が僕が」「私が」と代わりに走りたがる子が多いように思う。

今日もマラソンをしており、早い子は早く走り、遅い子はゆっくりながらも完走することを目指して頑張っていたが、自分のペースで走るの、友達と一緒に励まし合いながら行くということが少なかったかなという反省点はあったように思う。

永井教育長 もう1つ実質的な連携については、どのような状況か。

佐野所長 今のところ実質的な連携はしてない。幼稚園の方から研修会に誘っていただいたり、架け橋プロジェクトについて研修に行かせてもらったりしている。

阪本町長 この就学前教育について、教育委員の皆さんに意見を伺いたい。

東谷委員 先般、幼稚園訪問に行かせていただいて、今まで行った訪問では、朝一番に登園の様子から始まって、子どもたちが好きなことをやって、園全体を走っているという様子があり、また、子どもたちが部屋に入って、どのような行動をしているのかなというのを見せていただくというのが今までのパターンであったが、今回は、たまたま雨の日で、子どもたちは外で遊ぶことができず、部屋の中で遊んでいるという状況だった。部屋の中での様子を見させていただくと、子どもたちを集めて、先生が話をされて、対面的にしっかりと子どもたちの受け答えができている。子ども達はなかなかしっかりしているなという思いで見せていただいた。そのあと教育委員の講評があり、私は園に対して、子どもたちが、皆の前で、集まって話をする、話ができる、そういった場面をもっと作ってくださいというお願いをした。

なぜこういうお願いをしたかというと、以前年度初めに、小学校1年生を見させていただくと、授業が全く成り立っていない、子ども達はしゃべってい

るし、先生の話も聞いていない。私が見る限り、1つの授業に対して、ずっと座った状態で話をきける子どもは、7歳ぐらいではないので、少なくとも10分、15分先生話を聞けるような子どもたちを作りたいという思いを持ちながらいつも学校訪問をさせていただいている。そういったことで、基本的に人の前で話すことができる、あるいは、人の話を聴ける、そういった状況を作っていたらありがたいと思う。

子どもたちの神経回路は5歳までに約80%が形成される。私の読んだ文献では、3歳までに脳の80%が形成されて、しかも6歳までには90%ぐらいが形成されると書かれていた。就学前の時期は、人生の中でほんとうに短い。この架け橋プログラムの時期は2年間であるが、この2年の間にそういった教育ができる。先生方は、この幼児教育をするという立場にいらっしゃるので、教育に対して重点的に取り組んでいただいて、人の話をしっかりと聴ける、落ち着いて聴ける子どもたちを作りたいなと思っている。

暁委員

資料の中の上牧町の子育てをめぐる現状と課題を見て、昔とは比較できないぐらい今の子育ての環境は、保護者も含めて、すごく変化があって大変だなと思うが、東谷委員がおっしゃったように、昔は、幼稚園の入園式では子どもは1人で座っていたが、今は親と2人で座っている。30年ほど前は、泣いていても1人で並んでいた時代から、いつからか親子で入場してくるようになってきた。こういうふうに変わっていくんだと思いながらも、何かけじめというか区切りというか、ここからは自分でいろんなことしないといけない、ここからは先生と友達と一緒にこの時間は座って勉強しないといけないということをきちんと指導するというのはすごく大事なかなと思っている。

いつも幼稚園訪問に行くと、子どもたちの明るくて素直で、人懐っこい様子を見て楽しませていただくが、小学校に行くとやっぱり気になるのは、先ほどから出ている、座れない姿勢の悪い子、タブレットや教科書をすごく近くで見ている子、肘をついて食べる子。どの学校に行っても、気になっているところで、それは講評のときにも何回か言わせていただいた。教育長が提案する運動が、子どもたちにとってどれだけ大切かというのは、すごくよくわかるので、これは上牧町の子育ての軸として、どんどん取り上げていただきたい。

子どものときにやってきたことは大人になってもなくなることはないし、例えば、こけるときに、でんぐり返り1つできれば、大きなけがはしないとか、運動能力は学習能力と同じように進歩していくものだと思うので、このカリキュラムは大切に組み組んでいただきたい。

それと、この架け橋プログラムについて、大事な取組だと思うが、新たにこのプログラムやカリキュラムといった難しいことを見ていくと、すごく働き方改革に逆行しているような気がして、これをさらに今の先生方に課すのかと思うと、もう少し方法はないのかなという思いが少しある。今までやっていたことと違うカリキュラムを作るのは、ものすごく大変だと思うし、それを幼

保小が連携しながら一緒になって会議を重ねていくというのを考えると、働き方改革にすごく逆行しているような取組だと思ってしまうので、もう少し実質的に楽な方法で実施できないかと思っているところである。それと上牧町は、適度に田舎で適度に都会と思っており、若い子が出ていくのは、駅もないし働きにくい、大阪まで近いと思うが、大学とかで出てしまうとなかなか戻ってこない子たちがいっぱいいるので、やっぱり戻ってこれるまちにしたいかなといけないうのかなと思う。ここで子育てをすればすごく楽しいよねと思ってもらえたらいいかなと思っている。

あとせっかくある適度な田舎の部分、特に私が利用して欲しいと思うのは、幼稚園や保育所から少し遠いが、片岡城や久渡古墳で、観光地としてではなく、野山をかけ巡るような使い方ができるといいと思う。せっかくのこの環境を有意義に使っていただけたらと思いながら、このプログラムで、運動をすごく頑張りたいという思いと、それとは別に、働き方を少し気にかけていただきたいなっていうのと、両方に対して思いを持っている。

福井委員

上の子が上牧幼稚園でお世話になったが、先生がいろいろな遊び方を教えてくださる中で、はさみの使い方や鉛筆の持ち方、姿勢、トイレ、足し算など、遊びの中で教育していただけており、家に帰ってきたときに、こんなことを学んできたよっていうのを共有してくれることがあり、家庭だけではどうにもままならない部分を幼稚園ですごく教えてくださっている。

また、保護者も昔より教育現場に対して、意見をされることが多くなり、最近、小学校では「少しこけました」、「指を紙で切りました」ということで、わざわざ電話をいただくことがある。家庭が教育現場に対して期待しているものが大きすぎるというか、学校の時間での責任とか、求めることがすごく細かくなり過ぎていて、子どもも自由に遊びきれていないように思う。先生たちが選択肢をたくさん考えてくれているのをすごく狭めている気がするので、何か企画しているものの共有があれば、家庭側もやって欲しいということでスムーズに受け入れることができるのかもしれないと思う。おそらく親側の要求が高過ぎて、子どもの学びを狭めている場面もたくさんあると思うので、保護者側も考えないといけないと思う。

あとは、自分自身が子どものときに、冬は毎日マラソンがあったりとか、幼稚園でも乾布摩擦をやっていたりとか、運動会があるから運動するというわけではなくて、日々の活動の中に運動が必ずあった。そのほか、毎日の活動の中でフラフープ大会や縄跳び大会があったが、最近は、身近な運動の機会が縮小されている気がするので、日々の生活の中でもっと体を動かすことができれば良いと思う。こけたときに顔を打つ子どもも多く、習い事に行かせることができない家庭もたくさんあると思うので、学校でできるだけ体を動かしていただけたらと思う。

渡邊委員

教育長が挙げているような、運動しながら経験するいろいろなルール厳守や失敗の再挑戦などは、昔の話で申し訳ないが、私の時代は、中学生がよちよち歩きの子まで集めて、一緒に遊ばせており、その中でいろいろな経験をしていた。そこで怒られたり、平等を学んだり、転んだときに自分で起きあがったり、中には叩かれて、嫌な思いをする、そういうことが今はないと思う。

クラブ活動が大事というのは、先輩後輩といった縦のつながりを経験できるからだと思っており、私の息子が35年前に二小に行っていたころは、2年生から6年生までで、少人数で1チームを作って、例えば6年生が修学旅行に行くと、みんなにお土産買うなど、縦のつながりができる教育があり、それはいいなと思った。

幼保小の連携を行うことで、弟、妹をかわいがるような力が付くと良いと思う。良い方法だと思うのでぜひ取り組んでほしい。また、この取組を通じて先生がどの程度の力を注ぐ必要があるのか、その辺もこれから勉強させてもらいたい。

阪本町長

第1回の総合教育会議の中で、私の方からパルクールのお話をさせていただいて、私のそういう提案を受けて、教育長が今回の架け橋プログラムを作られたと思っている。保育所でも幼稚園でも、体操教室や英語教育に取り組んでいるが、毎年同じような内容だと思う。資料の3ページのところにもリズム遊び、ダンス、鬼ごっこ、跳び箱、鉄棒、平均台、パラシュート、体感遊び、ヨガなどいろいろ書いており、全て幼稚園や保育所で取り組んでいたわけではないと思うが、いろいろな形で取組をさせていただくことによって、非認知能力がさらに発達していく、そういう積み重ねが将来的には大きく影響してくるのかなと思っている。

先ほど働き方改革の話もあり、また12月に幼稚園でヒアリングもしていただけるというような話だったと思うので、そういうところも聞いてもらいながら、より良い方向に上牧町の幼保小の連携を進めて、取り組んでいければ一番いいのかなと思っている。

5歳までに脳の神経回路の約80%が形成されるとあり、やはり5歳児というのは発達段階において、社会性や言語力などが一番発達してくる時期だと思う。私の施策の中の1つとして、5歳児健診の実施があり、来年度の実施に向けて担当課の方で進めていただいているような状況である。1歳半や3歳児健診については、母子保健法で決まっており、5歳児健診を実施することで、就学前健診を含めて小学校へ入るまでの一連の流れができると考えている。

また、発達障害の子どもに対しては、小学校に入るまでの「ほほ笑み教室」や小学校から上の学年の「ペガサス教室」を実施しており、5歳児健診を含めた一連の健診を通じて、発達支援につなげられるようにしたい。来年の実施に向けて、現在進めている状況であるということを報告させていただく。

教育長

教育委員の皆さんに言っていただいたことは、全くそのとおりで、落ち着いて人の話を聞ける、けじめをつけられる、しっかりと運動していくというのは、いわゆる非認知能力に分けられるようなもので、結局、駆け橋プログラムでは、幼児期の終わりまでに育って欲しい姿というのを、しっかりと整理して、それを共有して取り組むことが大事である。

0歳から15歳の中学校を卒業するまでは、上牧町で育ってくれる。就学前の段階では、幼稚園や保育所があり、小学校へ上がって、そして統一の中学校へ集まってくるので、それぞれの子もたちの育ちをみんなで共有しておきたい、そのための駆け橋プログラムだと理解していただいていると思う。

先生方の負担を心配していただくということもあるが、そんなに負担にならないようにと思っている。今、幼稚園や保育所でやっていた内容それぞれを共有しあっていく中で、相乗効果が期待できていると思っている。駆け橋プログラムについては、岡野先生は、3年ほどかかると言っていたが、少し頑張っ取組を進めていきたいと思っている。繰り返しになるが、小学生も含めてしっかりと子どもたちには運動してもらう。今よりも、2倍も3倍も4倍もしっかり運動してもらって、大きくなっていてもらいたい。

合わせて、この非認知能力に良いとされるのが読書、特に就学前は絵本の読み聞かせがメインになると思うが、この運動と読書で上牧の子どもたちは、力強く成長して欲しいなという思いがあるので、今後も教育委員会をはじめ、いろんなところで共有させていただけたらなと思っている。

案件2 教育大綱・教育振興基本計画・総合計画の統合について

(担当課説明)

東谷委員

教育振興基本計画と教育大綱、総合計画の統合について、教育大綱と教育振興基本計画を統合するという考え方はわかるが、総合計画に統合するというのは、法律のどこに謳われているのか。

事務局

資料の2ページ目の(2)番で根拠を示しており、これは法律に根拠があるものではないが、国が実施した「法律に基づく計画とその他の計画の一体的策定の可否について」の調査結果の中で統合が可能ということが示されている。

東谷委員

この調査は、どこの省庁が回答しているのか。文科省の回答なのか。

事務局

手元に資料がないので、後ほど確認させていただく。

東谷委員

教育委員会は文科省の管轄で、総合計画の中に教育大綱や教育振興基本計

画が含まれるというのは、本当に問題ないのか。

事務局 実際にこの方法をとっている団体があり、伊丹市や西宮市で事例がある。

東谷委員 伊丹市は、まちづくり基本条例の中で、この統合について謳っているが、上牧町では、まちづくり基本条例の中で謳われてない。

事務局 統合の根拠については、まちづくり基本条例を根拠にしているわけではなく、国が実施した調査結果を根拠として、一体的策定が可能であると事務局として考えたということである。

東谷委員 この３つの統合については、同じようなものを１つにまとめられるので良いと思うが、統合の根拠については、しっかりと確認しておいてほしい。

事務局 その部分については再度確認をさせていただく。

（確認の結果、本調査は内閣府が実施したもので、文部科学省が総合計画での記載が可能と回答している。

※参照：内閣府ホームページ＞内閣府の政策＞地方分権改革

＞義務付け・枠づけの見直し

＞法律に基づく地方計画等の一覧（令和６年１２月末時点）

永井教育長 教育文化の項目に関して、順番を変えることは可能か。年齢を追うごとに並べて欲しいと思っている。就学前教育を先に持ってきて、学校教育、生涯学習、生涯スポーツ、文化財という順番で進めていただけたらと思う。

事務局 現在、第６次総合計画の策定に向けて取組を進めているところであり、構成については、調整可能である。

永井教育長 今後の流れについて、令和８年度の前半というのは、具体的に何月ぐらいに総合教育会議を開催する想定なのか。

事務局 基本計画（案）を審議会で確認してもらうのが、８月、９月ぐらいなので、７月までに１回開催したいと考えている。

永井教育長 現行の学び推進プランについて、それぞれの取組に対して目標や目標値があり、これを評価しないといけないと思っており、それを令和８年度の最初の方で実施するのは難しいと思っている。

事務局 今回、統合を考えたのは、学び推進プランの進行管理も併せて行うことができるようになるという理由もあり、現行の学び推進プランは、PDCA サイクルを回しながら進行管理を行うこととなっているが、現状その体制が整っていない。総合計画であれば、毎年内部の検証委員会の中で進行管理を行っているため、統合することで、進行管理も適切に行えるようになると考えている。

永井教育長 ということは、現行の学び推進プランについては一旦置いておいて、新たに計画を作り直すという考え方で良いのか。

事務局 現行のものと新たに作るものを分けて考えられたら良いと思っている。

事務局 補足として、学び推進プランは、総合計画と比較するとより詳しい内容が記載されているため、統合するとした場合、内容の取捨選択が必要になってくと思う。

暁委員 学び推進プランでは細かく記載していたことが、総合計画では簡単な記載にまとめられたときに、それがすべてだと言われてしまわないか気になる。上牧町の教育はこれだけのことしているんだということが伝わりづらくなるように思う。

事務局 統合するというのは、あくまでも事務局からの提案であり、教育委員会として、教育振興基本計画は別で作成した方が良いという判断であれば、それで良いと思う。

東谷委員 総合計画に統合するというのであれば、内容のバランスに注意しながら進めてもらえば良いと思う。

阪本町長 今事務局が説明したように、学び推進プランを総合計画に統合して、今後は、評価しながら進行管理をしていくという形を考えているが、それに対して何か意見があれば、また言っていただければと思う。事務局の方でも、いろいろと良い方向になるように検討してくれているので、委員の皆さんもよろしくお願ひしたい。

以上